将来の夢は『勇者』ですが何か？

鳥籠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
将来の夢は『勇者』ですが何か？

【Ｎコード】
Ｎ６２４５Ｓ

【作者名】
鳥籠

【あらすじ】
ファンタジー小説の読みすぎで異世界に行きたいと切に思う氷（ひ）芋（なた）。そんなある日、彼は帰宅中に夢にまで待ちわびていた事が……！

ウェルカム非日常！！

２年４組

名前：霧崎　氷兮
（きりざき　ひなた）

希望進路：『勇者』

「…テメーは馬鹿か。」
「いいえ。」
「じゃあ、なんで進路選択でこんなん書いた?。」
「いやー。それはですねぇ、俺のこの天才的脳ミソが考えた結果で
っ…っ痛ぁっ！！」
ここは職員室。氷兮は担任に呼ばれた。まぁ、勿論、悪いことをし
た覚えは全く無い。
で、担任に呼び出されて、さっきの時間に書いた『進路希望用紙』
を目の前に差し出された。
そして、担任は頭に真顔でチョップを一発。
うん。普通そうなるね。進路が『勇者』て（笑）
「…お前、もう高校２年だぞ?来年には進路を決定しなきゃいけな
いのに…。ふざけてんじゃねーよ。」
「ふざけてないですよ。これはマジでっ…っ痛ぁぁあっ！！ちょっ
！先生っ痛いっすよ！いや、マジでっ！！」

結局、担任から新しい用紙をわたされ、家で『真面目に』書いて
こいと言われて職員室を後にした。

勇者になりたいって言うのは本気である。しかし、それは他人から見たら馬鹿としか思われないだろう。まぁ、実際の所、俺はファンタジー小説の読みすぎでこうなったのだと思う。『勇者』『魔王』『魔法』『ドラゴン』。本当にこんなのが居たり有ったりしたらどんなに楽しい人生だっただろうが…。いつもそんな事ばっか考えている。

しかし、この世界にはそんなのはないため、異世界から勇者召喚！的なノリで異世界に行って勇者になって魔法使ってドラゴン乗って魔王倒してお姫様からの逆プロポーズ…。

「…あぁ。異世界行きてぇぇなぁぁあ！！！！」

下校中に一人で絶叫。近くに居たおばさんから冷ややかな目線が痛い…。

と、その時……。

―…カッ！！…―

目映い光が突然目の前を真っ白にした。

普通はここでパニクるが、今の氷岁は…

「まっ、まさかっ！！この展開は異世界トリップ！？うはっ。来た来たぁ！！さよなら！元の世界っ！！さよなら！日常生活っ！！」

そして、意識が飛ぶ直前に氷岁は最後に叫んだ。

「ウェルカム！非日常っ！！」

ウェルカム非日常！！（後書き）

これからチマチマゆっくり更新していきまぁーす（ˋ・ω・）ˎ

違います。

…うるせーな。なんだよ。人がせっかく気持ち良〜く寝てんのに…
…って、まて。俺は、こんなクソ冷たい床で寝た覚えねーぞ？

「…せ、成功だっ！！やはり、私の考えは当たっていたのだっ。」
「やっと、世界が平和になる日がきたんだ！！」「ありがたやありがたや…」

…あぁ。そーだったそーだった。俺ってば、異世界に召喚されたんだったぁ。てことは、みんな俺を待ち望んでんだね〜。この俺、『勇者様』を。

氷岁はわざとらしく頭を降りながら体を起こす。
「…ここ、どこだ？」
わざとらしく、周りの声のするほうに誰となく言ってみる。
「おぉっ！お目覚めでございますかっ。」
すると、一人の長身の男が近寄ってきた。男は黒くて長いローブと杖を身に付けている。男は深く被ったフードをとり、その美しい顔を露にした。
「私、名をラウムと申します。貴方様を召喚した者です。」
召喚！！やはり、異世界に来たんだっ！
氷岁はワクワクしながらラウムと名乗る男にに聞いた。
「召喚ってことは、ここは本当に異世界なんですね？」
「はい。勿論です。」
「…てことは、今日から俺は……」
「その通りでございます！今日から貴方様は『魔王』でございます。

」
「……ん？今、何て？？」
「え、いや、『魔王』…と申し上げましたが。…あぁ。突然の事に混乱なさっているのですね。それはしょうがない……」

……うん。何かの間違えだな。これは。俺は勇者としてこっちに召喚された。けど、間違えてこっちの…えーと、魔王？がいるとこに堕ちちゃったんだ。そうだよ。きっと。そうじゃないと困る…。

「……であるからして、今後は貴方様には……」
ラウムは氷岁が聞いていないのも知らずペラペラと喋っている。
「……あのぉ。えーと、ラ、ラウム…さん？」
「はいはいっ！何でございますでしょうか！？」
氷岁はふぅ、と息を吐き、キラキラ輝く青いラウムの瞳を見て言った。
「俺は魔王じゃありません。何かの間違えです。」
「……」
ポカーンと口を開けるラウム。氷岁は構わずもう一言。
「と、言うわけで元の世界に還せ。」

影

氷岁は悩んだ。
…どうしてこんな所にいるのだろうか??おかしいなぁ。俺、ラウムさんに魔王違いますって言ったよね?還せって言ったよね?なのにあの野郎、何をご冗談をだ?くそっ。まさかそのまま担ぎ込まれてこんなとこに放り出されるとは。しかも、何故か外から鍵かけやがって!

氷岁は部屋をイライラしながら見渡した。そこは広い部屋だった。40人入る教室2つ分位の広さだ。部屋には美しい彫刻が施された大きなベッドや机があり、その他の家具までもが高級感溢れている。……が、しかし。机の上には大量の資料の山が雪崩をおこし、大きな本棚には古めかしい厚さが20センチは有ろうかという本達。羽ペンやインクがベッドのサイドテーブルの上にある紙切れに無造作に放り出されている。
まるで、さっきまで誰かが居たかのような部屋だ。それに、誰かが居た気配が薄く残っている。……気がする。

コン、コンー…
「失礼致します。」
重そうな黒い扉がゆっくり開く。野郎(ラウム)かっ!?と思ってばっと振り向き、鍵を開けて入ってくる影を睨む。
部屋に音もなく入ってきたのは、本当に『影』のようだった。それは、ラウムの様に黒い踝まで長いローブを纏い、フードを深く被っている。そのローブの隙間から覗くのは、しなやかな白い腕。と

ても人間ではないかのような白くてポキッと簡単に折れそうな腕から生えるこれも美しい指先には、アーモンド型の黒い爪がのっている。そんな見とれるほどの美しい手が握るのは、長い杖だった。

「…貴方が、ヒナタ・キリザキ？」

見とれていた氷岁は突然の問いにはいっ！と答える。「ふぅん。」彼女（声とこの美しい腕からして）は、興味深そうにじろじろとフードで見えない目で見ている。反応に困っている氷岁に気付いた彼女はあぁ、と言ってフードをゆっくり外した。それと同時に、彼女の波立つ黒い艶のある髪がフードから零れ落ちてきた。

「失礼しました。わたくし、この城に住みます『ブネ』と申します。」

氷岁はブネの美貌に驚いた。ブネは、美しい赤い唇をもち、目はちょっと上がっている。

「…ヒナタ様？」

「あっ。はい？何でしょうか…。」

「突然ですが、申し上げます。」

ブネは顔を氷岁の前、鼻が当たりそうなほどに近づけ、美しい笑みを浮かべながら言った。

「本日、わたくしは貴方様の『妃』に選らばれました。」

逃げられません。

「本日、わたくしは貴方の『妃』に選らばれました。」

……？妃ってなぁに？
あれだよね。妃って要するに…まぁ、『妻』的なあれだよね？？

氷兮は控えめに聞いてみた。
「…妃って、どう言うことですか？それに、俺はえーと…ま、魔王？じゃないし。……まず、赤の他人だし？」
ブネは少し微笑み、氷兮から一歩離れて近くにあった椅子に腰かけた。
「貴方は第１０３代魔王です。その為にここに喚ばれたのですよ。」
「……。マジでか。」
「はい。」

おいおいおいおいっ！マジで俺、魔王になっちゃったわけ！？！？
ヤバイよぉ…。どうしよぅ。

頭を抱えてうめく氷兮を不思議そうに見ていたブネは突然スクッと立った。
「ヒナタ様。そろそろ時間です。」
「？…時間？？」

「えぇ。さぁ、早く着替えて下さい。」
「着替えって???」
すると、ブネはパチンッと指を鳴らし、突然氷岁の目の前に黒い大きな箱が飛び出した。目を丸くする氷岁はブネが手を下ろしたと同時に落下する箱をギリギリで捕らえる。
「それに着替えて下さい。…では、わたくしは準備がありますので……。」
「えっ…。」
「大丈夫です。箱の中に貴方を導く使者が入っています。着替え終わったら、付いていって下さいね。」
「…使者?」
氷岁は箱を少し開ける。すると、その隙間から黒い紙でできた様なペラペラの蝶が優雅に出てきた。
　気が付くと、ブネは部屋の扉を開けて出ていくところだった。そして振り向いて言った。
「ちゃんと、来るのですよ。」
「……。」
ブネは最後に辛うじて氷岁に聞こえる声で呟いた。それはそれは冷たく…。
「…逃げられませんからね。」

…ーバタンッーー…

氷岁の輪郭をゆっくりとなぞるように汗が滴る。
「……怖っ！！」

術式ってなに？

黒い肩から足までの長いタートルネックのワンピースの様な服。その上からはゆったりした分厚くてクソ重い上着。上着には黒い生地に金色の糸であしらった手の込んだドラゴンの刺繍。さらにその上からは帯の様なものを肩からかける。靴はつま先が尖った革靴。

「…重いよ。これ。」

動くのも膨大な体力を消耗する服を引きずりながら、氷岁は着替えているあいだずっと部屋をふわふわ飛んでいた蝶に促されて部屋を出た。そこには、部屋を二人の大きな鎧を着た人が槍を持って微動だにせず立っていた。

ー…逃げられませんからね。…ー

ブネの言葉を思い出す。

…あぁ。脱出不可能なのね。

そして、氷岁は蝶がだいぶ先の曲がり角で止まっているのに気づき、汗をかきながら付いていった。

「お待ちしておりました。さぁ、中へ…。」

氷岁は、まるで25メートルプールをそのまま立てた様な大きな扉の前にいた。その扉の前で、ラウムが氷岁を待っていた。ラウムは足で床を3回叩く。すると、鉄と鉄が鈍く擦り合う音が響く。氷岁は両耳を手でふさいだ。一方、ラウムは何も聞こえていないかの様に構えている。

「さぁ、術式を始めましょう。」

「…え。術式……？」

すると、氷岁の両腕を何者かが捕らえる。しかし、どこを見渡しても腕を捕らえているのはただの『空気』だ。

「なっ！？ちょっ…。」

ラウムはただ笑顔で見ている。突然、体がフワッと地面から少し持ち上がる。そして勝手に体が前へ、扉の中へと運ばれる…。

扉の中。

そこは大きな部屋だった。部屋の中央には巨大な魔方陣があり、その周りを10人のローブを纏った者がブツブツ呟いている。その中の一人は、ブネだった。

「今から、貴方様の真の姿を術式により無理矢理ですが、引き出させていただきます。」

ラウムはそれだけ言って、パチンッと指を鳴らした。すると、氷岁の体が魔方陣の中央へ持っていかれる。

「大丈夫。直ぐに終わらせますので…。」

「ちょっ！！待てよ！説明しろよ！！おいっ！？」

ニコッと微笑みを向けるラウム。

そして、その微笑みはスッと消え、冷酷な表情と化した。

「…只今より、術式を開始する。」

ラウムの宣言により、ブツブツ呟いていた声がぴたりと止んだ。氷岁の額から汗が落ちる。

「始めろ。」

人間生活さようなら…。

ラウムの宣言で再び１０人の声が始まる。
すると、氷岁を中心に魔方陣が青白く光りだすとともにゆっくりと速度を上げながら回転していく。
「なっ！？おいっ、何だよこれ？術式って…」
氷岁はラウムに叫ぶが、彼もまた何かを呟いている。

『マン・ア・ゲシオン、メンスト・オン・メーズィス！！《我らが神ゲシオン、この者を真の姿に！！》』

１０人とラウムの声が重なった。
部屋がシーンと静まる。
「……何だよ。何も起こらないじゃ…っ」
突然、体中を駆け巡る様に痛みが氷岁を襲う。それと同時に、魔方陣の回転も速くなり、閃光を放つ…。
「うわわわわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあっっっ！！！！！！」

あ、頭が割れるっ！痛い…！体も焼けるように熱い…！！！

「始まったな。さぁ、今回の魔王はどんなお姿なのだろうか？」
ラウムは手を組んで叫ぶ氷岁を見ている。すると、その隣にブネが

音もなくやってくる。
「毎回思うんだけど、本当にすごい光景よねぇ。…やだっ、あの子気を失いかけてるわよ？」
「あぁ、大丈夫だよ。あの子は。」
「…なぜ？」
ラウムはブネの目を見て笑った。ブネは彼の目の奥に在る『何か』を感じて身を引いた。
「あの子は、『覇王』の血縁だから…。」
ブネは固まった。
「覇王の…血縁？そんな…彼は、あの時…」
ラウムは彼女の口元に人差し指を置き、その続きを言わせなっかた。
「それ以上は、軽々と口に出してはいけないよ。」
ブネは、冷や汗をかきながらその場に立ち尽くしていた…。
―…まさか、あの人に血縁がいたなんて。…―
ポンッとライムに肩を叩かれ我に返る。彼は目で氷岁を見るように指示する。
「ほら。終わったようだよ…。」
「！？…あ、あの姿は…。」

あの激痛は何の前触れもなくピタリと終わった。
気づくと、ずいぶんと視線が高くなった気がする。…いや、確実にものすごく高くなっている。
辺りを見回すと、はるか下にラウムとブネ、その他のローブをまとった人々がこちらを見上げている。
「「？おい，何をし…た？」」
氷岁は訳が分からず、ラウムに問おうとして、声を出す。
自分の声を聞いて不思議に思う。

自分の声は確か、普通の男子の標準くらいだったはずだ。なのに、今発した声はずいぶんと低く、響きを持っている。
決して人間ではありえないような…。
「…は、覇王様？」
言ったのはブネだった。
「「はおう？」」
「あぁ。これはこれは…！！まさか、こんなにも強い魔力をお持ちだったとは！」
両腕を上げて氷岁を見上げるラウム。
「「お、おい。何なんだよ？」」
聞きなれない声を発する自分に戸惑いながらも、なぜか小さく見えるラウムに聞いた。
「それが貴方様の真のお姿ですか！」
「「真の、姿？？……！？」」

ラウムに言われ、自分の体を見る。
身体全体は黒い光沢のある鱗（うろこ）に覆われ、指は４本で鋭い鉤爪。
さらに、自分の意思で動く初めての感覚が背中とその下あたりに…。
それは『翼』と『尻尾』だった。

ー…えっ？何これ？？うーんと、あれかな？ドラゴンみたいな。黒いドラゴン。ブラックなドラゴン？……マジでか。
いやね、カッコイイよ？うん。黒い鱗とかめっちゃ綺麗だし。でもでもでもさっ！！俺、確かにドラゴンとか乗りたいとか思ってたよ！？
でもまさか…自分がなるとか考えていなかったんですけど。えっ？どうしよー…。

氷岀は完全に停止しています。

説明しやがれこの野郎。

「「説明しろ。そして元に戻せこの野郎。」」

氷岁は長い首をしならせてラウムを見た。（近づいて気づいたが、自分の頭は長身のラウムと同じくらいの大きさがあるらしい。）

そんなことにも動じないラウムは、ニコニコしながらなにも抵抗せずに説明した。

ラウム曰く、

氷岁のように、異世界から来た人間はこっちの世界では3日しか身体が持たないらしく、己の内に眠っている魔力を引き出す必要があるらしい（異世界から来た者は内に秘めた魔力が大きいらしい）。

そうすれば、異世界から来た人間でもこっちで生きていけるとのこと。

「「だから？だからなんで俺はここで魔王になれって言われるわけ？」」

つい1年前、クォールス王国という国が召喚した『勇者』一行がここまでやってきて第１０２代魔王（彼も勝手に召喚されたんだって。）を倒してしまった。だから、早く次の魔王を見つけなくてはいけないと思い，探し続けたがなかなか魔界では見つからなかったのだそう。そこで、ラウムの提案で、「勇者が召喚できるんなら魔王も召喚で出来るだろう。」といって結局、第１００代～第１０３代（氷岁）の魔王は召喚されたらしい。

「「…すべての原因はお前か。…で？なんでこんな姿になっちゃったのさ？人間の要素ゼロじゃんか。どうしてくれるんだよ。」」

ここは魔物や悪魔がいる魔界と呼ばれるところ。その影響で魔力を開放したらこの姿になったのでは？とのこと。

「「うん。それは分かった。あと最後の質問。元に戻せるの？」」

自分で戻りたいと思いながら魔力を使えば元に戻れるし、今の姿になりたいと思って魔力を集中させればドラゴンにもなれる。

「「…魔力なんて知らねぇし。」」

「大丈夫だと思いますよ。貴方のお姿は第一級のものですから。」

「「第一級？」」

「はい。ドラゴンはもっとも魔力の大きな魔物です。しかも、貴方はそれだけでかいですし。」

やって見れば解りますから！っと言って促せれたのでやってみることにした。

だって、早くもとの姿に戻りたいんだもん。

氷兮は言われた通り、魔力とやらに集中してみた。

魔法が使えたよ。

以外と簡単に元に戻れました。

しかも、力が解放？されたからなのか、魔力を体内に感じることができる。

「ヒナタ様っ！試しにこの木を燃やしてみては？きっと自分の力を実感出来ますよ。」

「…いや、やり方知らないし。」

「大丈夫です。さっき、元に戻った時みたいに魔力を集中すればいいのですから。」

「むぅ。」

言われるがまま、ラウムが手にした木に魔力を集中してみる。

ー…燃えろっ！…ー

ボンッ！！

「あっ…。」

「おやおや。」

ラウムは木が燃える前に手を離したので被害はなかったが、木は黒い炭と化している。

「ちょっと加減を間違えましたねぇ。まぁ、これで解ったでしょう？貴方は魔法も使える様になった。だから、魔王としても十分やっていけますよ。」

ー…魔法が使えれば良いのかっ。……マジでか。ヤベェな。このま

まじゃ確実に魔王に担ぎ上げられちゃうよ。てか、すでに王妃が決まってるんだから、魔王決定してるのか？いやいやいやっ！！困る。メッチャ困るよ俺！！

「…ねぇ、ラウムさん。」
「何でしょう？」
「ホントに魔王…やらなきゃ駄目なわけ？」
「何を今さら…。当たり前じゃないですか。あっ！そうでしたそうでした。今後の予定ですが、今日から3日間は貴方様は自由に城内を見て回って下さい。あと、部屋に資料が置いてありますので目を通しておいて下さい。」
「……。」
ラウムはニコニコと氷岁の質問に答えたあと、部屋に戻るよう言った。どっちかと言うと、若干無理矢理この部屋を出された。

「…なぜ3日間も時間を与えたの？仕事は山ほど有るのに。」
氷岁が出ていった後、ブネはラウムに聞いた。
「ヒナタ様に言った通りです。…とりあえず、城内の構造を知ってもらわなくてはいけません。魔王様は忙しいですからね。今やっておかなくては。あと、仕事内容を記した資料に目を通してもらう事も大事ですから。」
「…それだけ？本当に…」
「口説い。」
ラウムは低い声でブネの言葉を征した。

「…では、私は仕事があるので。失礼…。」
ラウムは踵を返して部屋を出ていった。

崩しちゃったよ。

…ーへぇ。逃げられないってこの事だったんだ。ー…

氷兮は蝶に付いていきながら（部屋に戻るため）城内の廊下の壁を観察した。

壁には複雑な魔法で外と内からの侵入、退出が出来ないようになっている。さっきまで分からなかった事がだいぶ分かるようになってきている。これも、力の解放の影響だろう。

…ーむぅ。魔法が使える様になったなら、ここから脱出できると思ったんだけどなぁー…

何気なく壁を触る。

―バチッー

「おっ。ここの壁、構造（魔法の）が薄いな。あっ……こんなのが分かる俺って、もう人間じゃないのかな…。」

ちょっと落ち込みながらも、壁に魔力を集中してみる。

…ー崩れろっ！ー…

一瞬、目映い光が廊下を包み込んだ。すると、壁に当てた手を中心

に光の亀裂が入る。ガラスが割れるような音を立てて、魔法が崩れた。

「…出来ちゃった。」

…ーどうしようどうしようっ！！魔法崩しちゃったよ！？脱出出来るじゃん！…でも、その後どうしよう…。ここ、異世界だもんな。

……はっ！誰か来るー…

ーカツ、カツ、ー

「ヤバッ。」

ここの廊下は曲がり角が数十メートル行かなくてはない。足音が聞こえてくるのは一番近い2メートルそこ角だ。

ー…隠れる所無いじゃんっ！どうしよう。……あっ！魔法が有るじゃないか。でも、まだそんなに魔法なんて出来ないしなぁ…ー

ーカツ、カツー

「…っ！！」

そして、角から黒いローブを纏った人が現れた。

脱出しよう。

「誰かいるのか？」
ローブを纏った男が言った。しかし、そこには誰もいない。
「…気のせいか。……っ！！」
男は驚いた様に先ほどまで氷岁がいた壁へ走った。そして壁に手を付ける。
「結界が破られている！そんなっ…。この結界はラウム様が張ったもののはず。……この城内にはそんな大一級魔術師はラウム様しかいないはず…。まさか、人間どもがスパイでも寄越したか。…はっ！早くラウム様に知らせなくては！！」
男は急いで道を戻っていった。

「……行ったか？」
氷岁は姿隠しの魔法を解いた。そして、懐に無理矢理入れた蝶がフワッと出てきた。

…ー危なかった。はぁ、良かったぁ。まさか魔法でこんな事が出来るなんて！ー…

氷岁は男が走っていった廊下を覗いた。
「よし。いないな。」
再び結界を崩した壁に戻り、考える。

…ーどうしようか。あの男、ラウムさん呼びに行っちゃったよ？うーん。……もう良いや。うん。俺決ーめたー…

「逃げよう。後の事は考えない。」
そして氷岁は壁に手を付け、次はただの壁を壊すように魔力を集中させ、簡単に壊した。その外は広い庭だった。その庭のずっと奥、そこには何もない様に見えるが、大きな魔力の塊を感じた。それは、ここの魔力と種類の違う魔力が混じり合うような不思議な感じがした。

「よし。行こう！」
そして氷岁は城から一歩出た。

脱出しよう。（後書き）

多分これからは2日～3日のペースて投稿します。

還るわぁ。（前書き）

やっぱり最後にこれ投稿してから2日、3日投稿にします。勝手な作者でごめんなさい。

還るわぁ。

「ラウム様、大変ですっ！」
ここは、ラウムの書斎。ラウムは今、机の上に散乱しま魔道書や大量の資料に目を通していた。そんな所にやってきた『妨害者』を睨み言った。
「何事だ。騒々しい…。」
パタンっと読んでいた魔道書を閉じ、椅子（回転式）ごと黒いローブの男に体を向ける。男ら慌てた様子で言った。
「い、一階の廊下…えーと、あそこは……１２番区画です。１２番区画で一部、結界が破られてい…」
「まさかっ！」
ラウムは男が最後まで言い終わらない内に立ち上がった。その拍子に椅子が倒れ、机の上の資料の山が崩れる。
「…おい。」
「はい？」
ラウムは大惨事をおこした机を指差す。
「片しておけ。私は結界を修復してくる。」
「直接行くのですか？別にここからでも…」
「片付けろ。」
「…はい。」
そしてラウムは踵を返して部屋を出ていった。
「……片付けよ。」
男はそそくさと部屋を片付け始めた。

「何だ？これ…。」
氷岁は城から出て庭にいた。２つの種類の魔力が混ざり合っている

場所。そこは先ほどまでは何も見えなかったが、近くに行き手を伸ばすと自分の魔力を吸い取られた。直ぐに手を引っ込める。そしてそこに普通の小さな扉が浮き上がる様に現れたのだ。
「…何の扉だろう？」
「人間界と魔界を繋ぐゲートですよ。」
「っ！？」
とっさに後ろを振り向く。そこにはラウムが腕を組んで立っていた。
「結界を壊したのは貴方ですね？」
「……。」
「まったく。まさか魔方がもう使えるとは。どうやったんです？あの結界はまだ誰にも壊された事は無かったのですよ。」
「…言われた通りにやったんです。」
「言われた通りに？」
「いや、ただあそこが少し脆かったから…魔力を集中させて……。」
「……なっ」
ラウムは氷岁の言葉に耳を疑った。
「…集中、させただけですか……？」
「そうだけど…。」
「まさかっ。魔方陣無しで？あの結界は魔方陣なしで壊せないはず…。そんな危険なことを…っ！」
「？？」
ラウムの言っている事が全く分からなく、反応に困る氷岁。

…ー魔方陣？何それ。そんなん無くったって壊せちゃったよ？……てか、どうしよう。この状況。しかもこの扉、人間界に繋がってるって？じゃあ、そっちが　元の世界かな？もしかして還れるの？？ー…

ラウムに見えないようにそっと扉のドアノブに手をかける。

ーーバチンッーー

「痛っ！？」
ドアノブに触れた瞬間、電気が走った様に手に痛みを感じた。
「何をしているんです？…まさか、逃げようとか思ってませんか？」
「…駄目？」
「当たり前でしょう。」
氷岁は痛む手を擦りながらラウムを睨む。ラウムはガシッと氷岁の腕を掴み、言った。
「さぁ、帰りましょう。……大人しく言うことを聞けば痛くしませんから。」
「…やだね。」
氷岁は体に魔力を集中させる。

ビキッ、ビキビキッ！

身体中から音を立てながら変身していく。氷岁はドラゴンに変身した。流石にドラゴンの腕を掴むことは出来ず、身を引くラウム。
「「じゃ、還るわぁ。」」
「還しませんよ。」
しかし、氷岁は黒い翼を広げ空に舞い上がる。ラウムはブツブツと呪文を唱える。すると、手の上に黒い球体が出来上がる。そしてそれを氷岁に投げた。球体は氷岁の首筋に当たって砕けた。その破片は散ったと思うとピタッと氷岁の首筋に張り付いた。そんなことに

は気付かない氷岁は、この大きな身体が入るように人間界へ通じる扉を魔法で大きくした。そして氷岁は吸い込まれる様に扉へ消えた。

「…ここまでは『シナリオ』通りだな。しかし、まさかあそこまで魔力が強いとは…。今後に響かなければ良いが……。」

ラウムは、氷岁が通った後溶ける様に消えていく扉を見ながら呟いた。

還るわぁ。（後書き）

次は人間界編。

夢見をしました。（前書き）

魔王氷岁は次の話に出ると思います。

夢見をしました。

ここはクォールス王国の西側にあるとある山。そこには魔界からやってきた悪魔や魔物が住み着いていて、誰も近づかない山だ。そんな人里離れたこの山に、クォールス王国が召還した『勇者』とその一行はいた。勇者の名は『リュウセイ』。彼はこの異世界に召還され、勇者となり今は魔界へ行くためにこの山で修行中だ。そして今は夜。星が空を埋め尽くしている。

リュウセイは山の比較的安全な所にパーティーの魔術師に結界を張ってもらい、テントのなかで目を閉じていた。

「…リュウセイ、起きていますか？」

「はい。起きています。」

テントをそっと開けたのは、緑色の長い髪を後ろで束ねたクォールス王国第一王女『アラストロメリア・G（ジャスティン）・クォールス』だ。彼女は、第一王女という立場にも関わらずに勇者一行に付いてきた勇敢な人である。と、共に彼女は『夢見』の能力者で、予言によって危険なことを何度も回避できた。今ではパーティーには居なくてはならない存在だ。

そんな彼女は美しいエメラルドの瞳でリュウセイを見て言った。

「…夢見をしました。」

「どんな事が、見えた？」

アラストロメリアは目を細めた。

「…覇王の血縁……黒き翼を持ち、その姿はまるで覇王の影の様……。影は……この人間界に…降り立つだろう。」

「…覇王、だと？……と言う事は、以前の夢見通り、新たな魔王が誕生したか。しかもそれが人間界に降り立つ？覇王の血縁？まさかっ。覇王はー…」

「しかし、それは決して…悪では無いであろう……。以上、です。」

「……。」

一通り予言を聞いたリュウセイは訳が分からず、言葉が出てこない。
「…魔王が、悪ではないと？」
「予言によれば…ですが。しかし、もしかしたら前の様に間違いかもしれません。一応、用心したほうが良いかと…。」
「あぁ。そうでだな。…ありがとう。こんな夜遅くに来てくれて…。さぁ、そろそろ眠りろう。」
「えぇ。そうします。お休みなさい。」
「……まだ敬語。」
リュウセイはぼそりと呟いた。
「はい？」
「…いいえ。何でもありません。今日は寒いから、暖かくして。お休みなさい。」
リュウセイは色気いっぱいにアラストロメリアの目を見てから、髪にキスをした。アラストロメリアはありがとうと言ってテントを出た。アラストロメリアがテントから出ていった後、リュウセイはハァーとため息をついた。
「…なんで分かんないかなぁ？」

少年が降ってきたよ

バキバキッ！ドサッー…

「…何だ？」

勇者一行の魔術師、『ストック・アスター』はテントの外で何が落ちた音で目を覚ました。ストックは上に青い宝玉が乗った杖を掴み、慎重にテントの外へ出た。

「……。」

そこには、一級貴族の様な衣装を身につけた少年が倒れていた。年は勇者リュウセイと同じくらいの１０代半ばだろうか。

「おい。」

ストックは杖で少年をつついた。しかし、全く起きない。仕方なく、ストックは少年の横に屈み、指を鳴らした。

「…んー。」

「起きたか。」

少年は唸りながら身体を起こす。

「お主は何者だ？」

「……人間。」

「…。」

まさかの返事に反応に困るストック。すると、少年は聞いた。

「ここは、日本ですか？」

「ニホン？……何だ、それは。」

「あれ？違うの？」

すると、少年は突然嘘だぁぁー！と叫び、頭を抱える。

「…おい、だ、大丈夫か？」

「大丈夫なわけねーよっ！！あぁ。なんでだよぉ…。せっかく戻れると思ったのにぃ。」

「……。」

ストックは嘆く少年を遠目で見ていた。

…ー面倒さいのを拾ったか？ー…

すると、ストックは少年の首筋に目が止まった。

「…！！！」

ストックは少年の服の襟を掴み、首筋を良く見える様に開いた。

「な、何だよっ！？」

「……お前っ！」

ストックは杖を少年の目の前に突きだし、呪文を唱えた。

「…エイス、レアド！（炎よ、燃えろ！）」

「わっ！？」

少年は間もなく、ストックの攻撃魔法で炎に包まれた。

「ちょ？何すんだよ！！」

「なにっ！？」

少年は無傷。炎の中からバリアを張りながら出てきた。

「くそっ！『魔王』めっ！！なぜここに居るのだ？」

「…魔王？えっ？なんで解ったの？」

「お主のその首筋の紋章がその証であろう！」

「…首、筋？」

少年は襟を開き、自分の首筋を見た。そこには、刺青の様に大きくドラゴンが刻まれていた。

「……なにこれ。…あー。あれか。あの時か…くそっ、あの野郎ー…。」

「なにを一人でブツブツと。」

ストックが杖を構え、呪文を唱えようとすると、少年は両手をひらひらと振った。

「ごめん。ちょっとタンマ。」

「聞く耳持たぬ！」
「いやいやっ！マジでストップ！！ちょ、話聞いてぇ！？」

ーしばらくお待ち下さいー

「はぁ、はぁ、…で。なに用だ？魔界を統べる者よ。」
「けほっ、けほっ、…統べてねーよ。……えーと、うん。魔王って言うのは誤解。それを言いたかった。」
「…何を今更。その紋章が何よりもの証拠ではないか。」
「これは俺は知らん。だってラウムの野郎に逃げる前に付けられたんだもん。」
「…逃げる？」
「そ。俺、実は何か知らんけど魔王として召還されたんだよ。で、逃げた。」
「……。」
「だからさ、そんな敵視しないで。目線が痛いよ。」
「…では、なぜそんなに魔法が使えるのだ？しかも、さっきから見ていれば、お主、詠唱を行っていないではないか？」
「魔法？あぁ、多分あれだ。なんか勝手に儀式的なのやられたんだ。詠唱は…知らない。」
「儀式…。」
「うん。儀式。」
二人の間に沈黙が降りる。
そして、始めに喋ったのはストックだった。
「…では、お主には他に真の姿があるな？」
「真の姿？あぁ、あれか。」
「見せろ。」
「えー。やだ。面倒臭い。」

ビッと杖を突きだす。すると、青い宝玉がうっすら光を放つ。
「消すぞ」
「やるやるやる。俺頑張る。」
少年は少しストックから離れ、目を閉じた。

覇王の影

ストックは言葉を失った。
彼の目の前には、成人男性の5、6倍はあろう高さの漆黒のドラゴンがいる。
その姿はまるで、かつてこの人間界を破滅寸前まで追い詰めた第102代魔王、紅き翼を持つ『覇王』の写し身のようだった。いや、それは写し身ではなく、『覇王の影』と言うに相応しいだろう。
「…もういい？」
少年はボソリと言った。その言葉で我に帰るストック。
「…お主、覇王を知っておるか？」
「ハオウ？……それさ、なんか前にも聞いたんだけど、何なの？ハオウって。」
「知らぬのか？…その姿までして。」
「……悪い？」
「いや、知らぬならば良いのだ。」
「えっ？なに、説明してくれないの？」
「あれは長いのだ。…あぁ、元に戻って良いぞ。」
「うん。」
ドラゴンは突然赤い炎を身体中に纏い、そして一瞬でその炎は消え失せ、その中から少年が姿を現した。少年は一度伸びをし、ストンッと地面に胡座をかいた。
「まぁ、まぁ、座りなさいって。」
「……。」
少年は地面をポンポン叩き、ストックを座るように促す。
「話、長くなるんでしょ？」
「…面倒臭い。」
そう言いながらも腰を下ろすストック。それを見て満足げに微笑む少年。

「あっ。そーいえば、お前何て言うの？名前。」
「…ストック・アスター。二級魔術師だ。」
「へぇ、魔術師なんだ。だからそんなに魔力が強い訳か。」
「お主の名は。」
「俺は霧崎氷岁。氷岁って呼んで。」
「ヒナタ。…魔王ヒナタか。」
「お願い。魔王とか言わないでおいて。」
「……。」
「…まぁ、自己紹介も終ったし、さっきの…えーと、ハオウ！ハオウの話だ。」
「あぁ。…本当に長いからな。」
「さぁ、こい！」

紅き翼を持つ者（前書き）

覇王の簡単な歴史とか勇者とか～。

紅き翼を持つ者

今から約１００年前。悪魔や魔物が住む魔界に一人の異世界人の男が召還された。彼は召還されて間もなく、正式に魔王の座に就いた。魔王は、初めの２０年ほどは目立った行動はしなかった。

が、ある日突然なんの前触れもなくクォールスの隣国『アフェル・シー』に魔界から巨大なゲートが開かれた。恐らく、この２０年はこの巨大なゲートを人間界に開くために魔力を貯めていたのだろう。そして、そのゲートを通って悪魔や魔物がアフェル・シーの首都にある城を攻撃した。そして、アフェル・シーが完全侵略されたのはゲートが開かれてから１０日という短い間だった。そして、アフェル・シーは人間界の悪魔や魔物の拠点となった。それが『４０年戦争』だ。

それを知った各王国は、防衛体勢を取り、その傍らで魔王を崩す攻略を練っていた。しかし、そんなときに魔王は動いた。魔王はこのクォールス王国へ手を出した。しかも魔王自ら戦地に赴き、一部それにより魔王の手に落ちた。それでも防衛体勢を事前に取っていたため、魔王の手に落ちたのは国土の１０分の１程度ですんだ。その時戦地に訪れた魔王の姿を初めて目にした人間は口々に同じ事を言った。

「全てを破壊する紅き翼を持つ悪魔。」

それから、人間は魔王を紅き翼を持つ『覇王』と言った。

覇王の手は日に日にこの地を侵食していた。アフェル・シーを中心に周りの国々を徐々に制圧したのだ。

そして、我らがクォールス王国は『勇者』となるものを異世界から召還することにしたのだ。数年前から王国は『勇者』となるものを探した。が、どの者も魔王へたどり着くまでには至らなかった。過去、幾度か異世界から召還した者がおり、数々の功績を残している。さらに、異世界人はこちらの世界の人々よりも断然魔力が大き

い。ならば、勇者を異世界から召還しようということになったのだ。
そこで召還されたのが『リョウ・カワジマ』だ。リョウは膨大な魔力を持ち、国中から期待された。
リョウが召還されてから5年後、修行を終えたリョウはいよいよ覇王のいるアフェル・シーへ5人の勇士を従えて決戦の場へ乗り込んだ。

勇者一行がアフェル・シーへ行って半年。突如決着は着いた。
４０年戦争に終止符を打ったのは、クォールス王国への勇者一行の帰還だった。しかし、そこにいるのは勇者を除いた5人だった。
曰く、
「リョウは一人で覇王がいる場所へ行き、戦った。しかし、私達がそこに行った時にはリョウと覇王はいなかった。その場には二人が戦った痕跡や魔力が残っていたが、姿はどこにも無かった。」
勇者と覇王はそれ以来行方不明となり、４０年戦争は幕を閉じた。
そして、魔族は徐々に勢力を弱めた。しかし、覇王が姿を消した後の魔族は魔界へ還ると思ったが、アフェル・シーをそのまま占領し、ゲートが開いたままなので、４０年戦争が終息した今でも魔族はまだ人間界に多くいる。

そういう設定だったんだ。（前書き）

短いです。

そういう設定だったんだ。

「…ふぅん？覇王って前の魔王だった訳か。で、何で俺に向かって覇王がうんたらって言うの？」
「お主の姿が覇王とそのまま同じ姿なのだ。が、覇王は紅い鱗だ。」
ストックは話終わり、一息着いたところでスクッと立ち上がった。
「…で？お主はどうするのだ。」
「何を？」
「これからだ。お主は魔界から逃げて来たのだろう？」
「むぅ。どーしよ。」

……ガサガサ……ヒョコッ

「ストック！やっと見つけたぁ。」
氷岁が悩んでいると、木々を避けながらひょっこり小さな女の子が出てきた。彼女は、緩なウェーブのかかった赤い髪とルビーの様なキラキラした瞳をもっている。
「……何ですか？アネモネ。」
アネモネと呼ばれた女の子はストックの隣に付いた。あれ？と氷岁に気付き、首を傾げながらストックに聞いた。
「誰？この人…。」
アネモネは氷岁を睨み付けた。氷岁は焦ってストックに助け船を求めてチラリと見る。
「え…。あぁ、どーしよ。」
ストックはアネモネの赤い髪を撫でて落ち着くように言った。そして焦った様に途切れ途切れに答えた。
「…こ、こいつはえー、…あれです。私の……」
「私の？」

「……で、弟子です。」

弟子（前書き）

調子のって1日二話投稿☆

弟子

「っっ！！！！？？？？？」
「えー！？ストックって弟子がいたの？あんだけボクには断ったのにぃ。」
「……ちょっと。」
氷岁は立ち上がり、ストックに耳打ちした。
ストックは黙って木陰に行く氷岁に付いていく。ストックはアネモネにちょっと待っていなさいと言ってブーブー言う彼女を待たせた。
「……なんかもっとマシなの無かったの？」
「……仕方なかろう。突然アネモネが出てきたのだから…。」
「弟子は無いって！だって俺のほうがお前より魔力上だよ！？」
ストックの眉がピクリと動いた。
「そんなこと何故お主が分かるのだ？」
「えー。だって分かるんだもん。あの、あれだよ。感覚ってやつ……？」
ストックは顔をしかめ、機嫌を損ねたように言った。
「…ならばあれか？こいつは魔王だと言えば良かったか？」
「……。」
「何も言えないだろう。今お主が魔王だと知れたら、どうなるか分かるだろう？」
「…分かったよ。」
氷岁は渋々認めた。今、魔王だとバレたらたまったもんじゃない。
ストックが庇ってくれただけでも感謝しなくては…。
「…さぁ、そろそろアネモネの所に戻りましょう。」
「うん。そーいえば、アネモネっていうあの子、誰？」
「アネモネは私達の仲間です。本業は『召還獣術士』です。」
「召還獣術士？」
「あぁ。主に一部悪魔や魔獣を召還するんです。」

「ふーん。あんな小さい子がね。」
「…？彼女はお主よりは年上だぞ。もう６０歳はいっているー…」
「まだボクは５８歳だぁぁぁあああっ！！！！」
「げふっ…！」
突然、アネモネが茂みからストックへのダイレクトアタック。見事にストックのみぞおちに膝蹴りをかます。
「……聞いていたんですか？」
「聞いてはないよ。ただちょうどそこだけ聞こえたんだ。」
「……。」
「ところでストック。さっきアラストロメリアが夢見したんだって。だから、それを伝えに行くようにリュウセイに言われて来たんだ。」ストックはみぞおちをさすりながら眉間に皺を寄せた。
「……夢見を？」
「うん。えーとね、なんか新しい魔王が現れて、それが覇王の血縁かも？みたいなのと、でも災いはもたらすとは限らないみたいな感じ。…？どうしたの。二人とも顔色が悪いよ？」
「……。」
「……。」
チラリと目線を交差させる氷兮とストック。
そんなことには気付かないアネモネはニコニコしながら続けた。
「あとね、明日はリュウセイが朝食を作るって。あの『ミソシル』ってやつ作ってくれるんだー。だから、明日は早くリュウセイのテントに集合ね。」
「……味噌汁？」

まさか異世界で聞くとは思わなかった単語を思わず口に出した氷兮。

…ーまさか、そのリュウセイって日本人！？ー…

リュウセイ

氷岁はアネモネが帰った後、ストックのテントで一晩を過ごした。氷岁はアネモネが言った『ミソシル』という単語について考えた。

…ー味噌汁を作るっていうことは、やっぱり日本人だろうか？　もしかしたら、こっちの世界に同じものが偶然あるだけなのかも知れないし…。いや。リュウセイとか明らかに日本名だしなぁー…

そんなことを考えていたら知らないうちに眠っていたらしく、テントの入り口から漏れる朝日で目覚めた。

「…起きたか？」

「……うん。」

ストックはすでに昨日と同じ、ワイシャツに黒いズボンの上にローブを纏っている。片手にはサファイアが乗った杖である。

「リュウセイが待っているので早く顔を洗ってきなさい。」

「…？俺も行くの？」

「あぁ。お主のことはリュウセイには言っておいた。私の弟子だとね。」

「……。弟子だって言われるとむかつく。」

「師匠にそんな事を言ってはいけない。そうだ。私の事はきちんと『師匠』と呼ぶのだよ。」

『師匠』はドヤ顔。

「え。やだ。」

『弟子』は生意気。

「バラすか？」

「……。」

朝っぱらからこんなことを話す二人。
この勝負は師匠が勝ち、ムスッとする弟子だった。

氷岁とストックは身支度を終え、テントのある場所から朝食を取るために例のリュウセイが居るところへ歩いて向かった。
「そーいえばさ、今更だけどここって何処なの？」
「そうか。お主は異世界から来たから知らぬか。」
「うん。あとさ、リュウセイって誰？それとアネモネとかお前とか。」
「師匠と呼びなさい。」
「…師匠とか……。」
ボソリと訂正する氷岁は、緩い坂のある森をスタスタと進むストックに、付いていく足取りが少し重くなる。そんなのを知らないストックは説明を始める。
「ここは、クォールス王国の西側にある山だ。この山はクォールスでは一番アフェル・シーに近い所で、ゲートが近いのもあるから下級悪魔や魔物が住んでいるんだ。」
「へぇー。…じゃあ、ここ危ないじゃん。なんでこんな危ない所にいるの？」
「悪魔や魔物を倒すための訓練、…まぁ、いわゆる修行だよ。」
「修行？ストックが？」
「いいや、違う。修行をしているのはリュウセイだ。」
「…そのさ、リュウセイって昨日から言ってるけど、誰？それ。」
「リュウセイはクォールスの『勇者』だが？……言ってなかったか？」
「……っ！！」
氷岁は『勇者』という言葉に反応した。

……ー勇者って本当に居たんだ！ーー……

挨拶

…ー待って。そのリュウセイって奴が勇者ならさ、何を目的に悪魔や魔物を倒しているんだ？…まぁ、予想はつくけどさ……。ー…

「…あのさ、その勇者一行って一体何を目的に修行してるの？」
氷岁の問いにストックは歩きながら顔だけを向ける。
「そりゃ…いつ魔王が現れても良いように鍛練…を……。」
「ですよねー。」
「…そう言えば、お主は魔王だったな。…バレない様に気を付けろよ。特にリュウセイ…勇者にはな。」
「分かってる。……バレない自信ないけど。」
最後の方は小さく呟いた。それを聞き逃したストックは前を向いた。
「さぁ、そろそろ着くぞ。」
ストックはそう言うと、木々の数が少しずつまばらになってきた。

森が開けた。

まるで森の中にクレーターができたかの様に広い空き地があった。そこには赤い三角形のテントが一つ、その横で火を焚いて上に置いた鍋をかき混ぜる男がいる。その火を中心に周りに丸太が2本あり、それを椅子がわりに座る3人。一人は、昨日の夜に見たアネモネ。その隣に座るのは長い髪を緩く結わいた美しい女性。向かいの丸太に座るのは長身の筋肉質な男。
「あっ。ストック！おはよー。」
アネモネがストックに気付いて手を振る。続いて氷岁にも手を振る。
「ヒナタもおはよー！」
「…お、おはようございます……。」

ペコリと頭を下げる。
次に、アネモネの隣に座っていた女性がストックと氷岁に気付いて腰を上げた。彼女は簡単にストックと挨拶をして氷岁に近づき、小さく頭を下た。右手を氷岁に差し出す。
「おはようございます。そしてはじめまして。…貴方がストックのお弟子さんのヒナタ様ですね？わたくし、クォールス王国第一王女アラストロメリアと申します。以後お見知りおきを…。」
氷岁は差し出された手をそっと握る。
「お願いします。」

…ーわぁー。物凄くタイプなんですけど。綺麗だなぁ。でもなに？王女様？なんでこんな危ない所にいるのかな？…ー

アラストロメリアは一度手をギュッと握って氷岁に笑顔を向けた。
「わたくし、名前が長いから『アーリア』って呼んで下さい。」
「はい。」
そして手を放すと、丸太に座っている男を手で示した。
「あそこに座っているのは、剣士の『ラーク・スパー』です。…彼、剣の腕は一流なんですけど、無口だからあんまり答えてくれないかもしれませんが、とても優しい人なんですよ？」
「…ヨロシクです。」
ラークに頭を軽く下げる。すると、ラークはこちらを向いて無言無表情でお辞儀をした。
「アネモネは知っていますね？」
「はい。昨日お会いしました。」
最後に、アーリアは鍋をかき混ぜていた男を示した。
「彼は我がクォールス王国の二代目勇者、『リュウセイ・カワジマ』よ。…リュウセイ！ストックのお弟子さんですって。」

アーリアがリュウセイを手招きする。すると、リュウセイは鍋を火から上げ、平らな地面に置いた。彼は憂鬱そうに立ち上がった。
「リュウセイ、この人はストックのお弟子さんのヒナタさん。ヒナタさん、この方がリュウセイ。」
「…よろしく。」
氷岁はリュウセイに手を差し出した。それに習ってリュウセイも手を差し出し、握った。

ーバチッ！ー

「…っっ！！」
氷岁が握っていたリュウセイの手で小さく火花の様なものが散った。それを避けようと氷岁は手を引こうとするが、リュウセイが手を離さない。
すると、頭の中に声が流れてきた。

…ーへぇ？君、あのヘタレ魔術師…いや、ストックの弟子なんだって？ー…

「…え。」
氷岁はリュウセイの顔を見た。リュウセイは不気味な笑顔を向けた。
…ー君、さっき彼女、アラストロメリアと挨拶した時、顔が随分と赤らんでたけど？ー…
「…え、いや……。」
リュウセイは握った手に力を込めた。
…ー手、出すなよ？ー…

「……。」
スッと手が離される。
リュウセイはさっきとは違う爽やかな笑顔を向けて言った。
「よろしくお願いしますね？ヒナタ君。先ほどの通り、僕はクォールス王国二代目勇者のリュウセイ・カワジマです。」
「……はぁ。」
猫被ってるなぁ、と思いながら氷岁は曖昧に返事をする。
「さぁ、挨拶は終りましたし、朝食にしましょう！」
アラストロメリアはそう言って氷岁の手を握ってアネモネとラークのところへ行くように促す。
氷岁を握った手を見たリュウセイは、小さく舌打ちをした。

真っ青の…。

「……。」

氷岁は左手に味噌汁の入った茶碗、右手にスプーンという和食と洋食のコラボに違和感をおぼえつつ、リュウセイ手作りの『ミソシル』を飲んだ。

そのミソシルは実に斬新だった。確かに味はやけにしょっぱい味噌の味だ。が、その色に氷岁は眉間に皺を寄せた。

「…あ、青い…！」

そう。　そのリュウセイ曰くミソシルは何故か真っ青なのだ。ちなみに、具はやっぱり真っ青な豆腐（らしき物）にコリコリした触感の海草みたいな物がぶつ切りにされて入っている。

チラリと横に座るアネモネを見る。

「うん！やっぱり美味しいなぁ。リュウセイの作るミソシルは！」

そう言いながら青い液体を美味しそうにすする。その他の人達もそうだった。

氷岁はその色を見ないようにズズッと一気に飲み干した。それを見たアーリアは氷岁の空の茶碗に再び並々と青い液体を流し込んだ。笑顔で。

しかも、だいぶ鍋の下の方だったのだろう。さっきより毒々しい色をしている。

…ーいやね、味は美味しいんだよ？『味』はね…。でもさ、この食欲が失せる様な色は勘弁だよ…。ー…

ミソシルを追加したアーリアに氷岁は苦笑いで言った。

「…あ、ありがとうございます。」

すると、アーリアは目映い笑顔でお玉を持って、

「いえいえ。まだありますから、どんどん飲んで下さいね！！」
「……。」
その後、氷岁はあと二杯のミソシル、計四杯のミソシルを飲んだ。

…ー朝食後

「…あっ。お皿、俺洗いますよ。」
氷岁はそう言うと、全員分の茶碗を回収して近くの小川へ行った。
その後を追うようにストックが着いてくる。
氷岁がバシャバシャと茶碗を洗い始めると、ストックは後ろから言った。
「…リュウセイはどうだった？」
「どうって？」
「いや……。」
「…あいつさ、俺がストックより魔力が高いって分かったみたいだよ。それに、凄い猫かぶりだった。」
「やはり。さすがは二代目勇者だな。少し身体に触れただけで分かるか。」
「いや、でもね」
氷岁は茶碗を洗う手を休め、ストックを振り返る。
「俺、多分あいつより強いよ。」
自信満々で言った。

俺だって仮にも『魔王』だよ。

「俺、多分あいつより強いよ。」
「……は？」
思わず聞き返す。
氷岁はストックを無視して続けた。
「あいつね、技術はあるけど魔力が極端に少ない気がするんだ。…多分、ストックより低いかも。あぁ、封印的なのはないと思うよ。」
「そ、そんなはずはない！リュウセイは初代勇者の『血筋』だぞ？それに、私と以前戦った時はあいつが余裕で勝ったんだぞ。…なのに、私よりも魔力が低いだと？少し身体に触れただけで分かるわけないだろう！」
氷岁は目を細めた。
ストックはその目を見た瞬間に体が固まった。動けない。
「…ストック。君、俺を舐めてるるでしょ？一応言っておくけどね、（認めたくないけど）俺だって仮にも『魔王』だよ？」
「……。」
「あの時、変な儀式を受けた時から自分でも分かってたんだ。…まぁ、正確にはこの人間界？に来たときかな。俺はこの人間界では多分だけど、『一番強い』。あとね、魔界では物凄い魔力の塊とかが何となくだけど沢山あったんだ。…けどね、人間界に来たら俺より強い魔力を感じたことが無いんだ。これって、近くにいたリュウセイ？が俺より強かったらとっくの昔に分かってることだよね？」
氷岁は目を閉じた。
その瞬間、ストックはまるで縄をほどかれたかの様に身体が解放された。しかし、知らない間にかいた冷や汗が頬を伝う。
「…けど」
「？」
「あいつは俺より『技術』はある。まぁ、俺はこの世界に来たばか

りだから『今』はね。」
「ぎ、技術？」
少し震える声でストックが聞く。
「そう。あいつ、魔力は少ないけど、その魔力をうまくコントロールして難しい魔法を使ってるんだと思うよ。……まぁ、それだけじゃないと思うけどね。」
最後のほうは微かに聞き取れる位に小さく言った。
氷岁はふうっと息を吐くと、洗ったお椀を抱えて立ち上がった。
「洗い終わった。…さぁ、行こうよ。お師匠様？」
「…あ、あぁ。」
ストックはあまり意味が分からないまま先を行った氷岁に着いていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6245s/

将来の夢は『勇者』ですが何か？

2011年8月31日19時51分発行